

学校を 再び居場所に

[1] はじめに

- ・「学校は何してるんだ」から「学校はもうあてにしない」へ
- ・2015年5月5日 こどもの日の朝刊

こどもの日の朝日新聞の社説は、豊島こどもWAKUWAKUネットワークの活動について取り上げていました。その活動のひとつ、子ども食堂で夕食を食べている中学1年生の女の子は「みんなが、話しかけてくれる。自分のためにご飯をつくってくれる。だから、生きていていいんだと思えた。」と語っています。地域で子どもたちを支える望ましい活動ということで紹介されていました。

その社説から、私が考えたのは、別のことです。この子は、自分が通っている学校の中で、「生きていていいんだ」と思える体験がなかったのだ、ということです。

学校では身につけなかった基礎学力をつけるための学習支援が各地で始まった時、「学校は何をしているんだ」という声が少なからずあったはずですが、でも、今学校でいじめられたことや、この事例のように、地域の活動で初めて認められた例が取り上げられる場面では、「学校は何をしている」という批判さえなく、「学校なんてそんなもんだ」という諦念が支配しているような気がします。

[2] 教育を受ける権利

- ・「学校へ行きたい」

教育を受ける権利は、何のためにあるのか

マララ・ユスフザイが「女子にも教育を」と発言したことで銃撃されたことは、世界中に衝撃を与えました。日本ではあたりまえの権利が保障されていない国はまだ多くあり、教育を受けられない子どもたちが、世界中にたくさんいます。その子どもたちの声を代弁し、マララは国連で「私たちはすべての政府に対し、世界中のすべての子どもに無償の義務教育を保障するように呼びかけます」と語りました。

『教育を受ける権利』が保障されなければ、社会に出て、それぞれの個性と才能を発揮して人間らしく生きることはできません。

しかも、『教育を受ける権利』を平等に保障することがなければ、すでに子どもたちが背負っている負の遺産、たとえば経済的な不利な条件や受けている差別をそのまま受け継ぎ、自分の可能性を伸ばす機会が失われます。ですから、教育の権利とは社会権の中の一つの権利と位置づけられています。

『教育を受ける権利』とは子どもたちが、未来の扉を自分で開くために必要な大切な権利です。「学校へ行きたい」ということは、「未来の扉を開きたい」という声なのです。

では今、学校は子どもたちが未来の扉を開くための力をつけられる場となっているのでしょうか。

[3] 貧困世代間再生産の構造と学校

- ・「学校が分ける」

選別する装置としての進学制度

日本では、中学校入学以前に基礎学力の差が広がり、しかもその背景に、自信がもてず勉強嫌いになっている例が多く見受けられます。中学校3年間でそれを回復することは難しく、そのまま高校受験をむかえることで、希望しない高校への進学、そして中退というケースも少なくありません。

高校中退つまり中卒という学歴のまま社会に出れば、就職でも不利になり、そのまま貧困状態に陥ることにも繋がります。

このように日本では、学校が未来の扉を開くのではなく、上級学校に進む過程で選別がすすみ、それが貧困の世代間再生産を生んでいます。

このような事態に対する危機感から、その高校進学を通して貧困の世代間再生産を少しでもくい止めるため、各地でボランティアによる学習支援が広がっています。

[4] 応急手当としての学習支援

その高校進学段階での貧困の世代間再生産を少しでもくい止めるために、各地で広がっているボランティアによる学習支援の活動が目指しているのは、基礎学力の補充や入試に合格できる学力を保障することだけではありません。その学習支援が担っている役割は他に何があるのでしょうか。

・学習支援が担っている役割

学力保障

自己肯定感

信頼関係

安心できる居場所

ロールモデル

上記のような幅広い役割をもつ学習支援への期待はますますふくらみ、活動団体も増加しています。

今、目の前にいる子どもを貧困の世代間再生産から救うため、高校進学を後押しすることが必要だということとは否定できません。

その必要性を「小・中学校のうちに塾通いが必要な教育が行われていることは義務教育の在り方として問題ではあるが、現在その改善を待っている余裕がないだろう。」(赤石千衣子『ひとり親家庭』岩波新書)と考えている人はたくさんいます。

けれど、そもそもその事態を“改善”する努力はなされているのでしょうか。

昔、炭鉱内の酸素が減って人間にとって危険な状態になる前に、その事態を予知するため、カナリアを坑内に連れていったという逸話が残っています。現在、学校に行かれなくなってしまった子どもたちや学校の勉強だけでは力がつかなくて困っている子どもたちがいますが、それは酸素不足の時カナリアがまず最初に倒れることに似ている気がします。つまり、だれよりもデリケートで傷つきやすい子どもたちが学校に行かれなくなったり、困難を抱えているということです。

その子どもたちの居場所をつくる、あるいは学習支援を行うことは、カナリアを保護することと同じです。では、酸素が不足している坑内の人間はどうなるのでしょうか。つまり、学校をよりよいところに改善する努力を同時に行うことが不可欠です。

それには、どうして、学校が子どもたちにとって居心地の悪いところになったのかという問いかけと、どうして塾に通う必要があるのかという問いかけが必要です。

[5] 学校の役割 ～学校にしかできないことはあるのか～

さらに、学習支援が広がるだけでいいわけではない、という理由がもうひとつあります。つまり10代の子どもたちの発達にとって、学校だからこそ、果たせる役割があるということです。

それは何でしょうか。

大江健三郎さんは重い障害をもつ自分息子光さんを育てながら、鳥の鳴き声を聞き分けるその能力をも

つ彼と森の中に暮らすという生き方を思い描くようになります。つまり学校に通わずに、ということです。最終的に光さんは特別支援学級に通いますが、そこで一人の友だちとめぐり会い、運動能力が光さんより弱いその友だちがトイレ行く手助けを始めることとなります。そして、誰かのために役に立てることが大きな喜びとなるのです。

10代の子どもたちが集団生活を送る学校には、他では代替のきかない大きな役割があるのではないのでしょうか。

- ・ 多様な人との出会いによって、お互い理解しあうことを学ぶ
- ・ 様々な活動の中で、集団的力量を発達させる
- ・ 歴史をえがく主体となる

この3つは、いずれもユネスコが子どもの学習権として掲げたものです。

学校には、当然気の合わない人もいます。それでも、一緒に集団生活を送り、違う意見をすり合わせて合意にいたる過程を経験することも必要です。

あるいは、様々な場面で、協同で何かをつくりだす喜びを見出したり、その中で自分を再発見するということもあるでしょう。

何より、クラス内でのルールを決めたり、生徒会活動によって、学校を自分たちが生活しやすい場所にかえる経験は、社会は自分たちの力で変えることができるという認識を培います。

[6] 今、学校はどうなっているのか

・「貝がら と パソコン」

教員が失ってはいけないものとは何でしょうか。優先順位をまちがえてはいけないことがあるような気がしてなりません。たとえば子どもたちのSOSを聞き逃さないアンテナもその一つです。

そのようなアンテナを持つためには、教職員が、心と時間のゆとりをもてなくてはなりません。

けれども、夜の9時を過ぎても、職員室の灯りが煌々と灯っている小中学校が増えています。やってもやっても終わらない仕事があるからです。

中学校の場合、授業、道徳、学活、総合で、22時間くらい受け持ち、それ以外に給食指導、清掃指導で週10時間、委員会指導2時間、部活動毎日2時間、会議週4時間、時間がどのくらいかかるかわからない分掌の仕事、行事の準備、生活指導、そして、様々な書類の作成、学期末には、テスト作成、採点成績をつけること、通知表の所見などの記入、他にけが人がでれば、病院に伴い、ガラスが割れたら片づけ、または、家庭とのやりとり、そして当然ながら、授業の準備、宿題の点検、提出物の点検・・・やってもやっても終わらないと言うのは、その仕事量に見合う時間の確保がなされていないからです。

たとえば、授業や会議のような、かならず時間を割かなければならない仕事があります。またテストを作成することや書類を書くことなどには、~~メ~~切があります。それらの必須事項を終わらせることが、最優先になります。

ひとりの子どもの様子がおかしいと気がついた時「放課後呼んで話を聞いてみよう」一番大切なはずのそういう仕事は、自分から進んで取り組まなければ、つつい後回しになってしまいがちです。

教育とは、種をまく仕事に似ています。けれど、その種から芽がで、苗が成長し花が咲くところをみることは稀です。

それでも、日々小さな喜びがあり、それが苦労を一時忘れさせてくれます。その小さな喜びとは、たとえば、小学校2年生の少年が、砂場の砂の中から探した小さな貝がらをプレゼントしてくれた時の喜びです。そういう小さなことに感動する心を教員は忘れてはいけないはずです。

けれど、今学校に押し寄せているのは、数値目標・達成までの計画（いつまでにどのくらい）・その評価・成果と課題を書類で提出・・・というこれまでの教育とはちがうスタイルの要求です。それらをまじめに期限内に終わらせようとするのが優先される時、失われることもたくさんあります。

教員が常にパソコンの前に座り、子どもたちが生活する場所に共にいる時間が減っていること、それらを問い直すことができなければ、学校はプラットフォームにはなりません。

[7] すすむ“子どもの貧困” と 学校

・地域のセンター

子どもたちの情報をキャッチするためのセンター

（家庭・地域をつなげる。卒業後も子どもたちが訪ねられる場とする。）

市町村は、そこにある中学校ごとに学区を設けています。もしその単位で、そこに住む子どもたちの情報を集めることができれば、自治体内の子どもたちのことはすべて把握できるようになります。

ですから、中学校を地域のセンターにして、子どもたち・保護者・地域住民からの情報を集めることは子どもの状況を把握するためには有効です。また、公立中学校を卒業した子どもたちが、卒業後も、困ったことがあれば、中学校を訪問できる場にしていくことで、広い年代への支援が可能になります。

・貧困の文化に対抗する文化

（例：暴力のない世界、平等な世界、共有と共存の文化の世界、広い可能性を展望できる世界）

子どもたちの家庭が暴力やあるいは男女差別的な文化で支配されている場合、子どもたちがおとなになってもその文化を再生産する恐れがあります。そこで、そのような文化ではない生き方を学校という場が提供する必要があります。また、子どもたちがもつ、自分の将来像についても、親だけが見本となるのではなく、もっと広い生き方を示唆することもできます。

・「自己責任論」を乗り越える

（誰でも幸せに生きる権利がある。セーフティーネットはすべての人に必要である。）

（貧困は社会の問題である。それらの認識は歴史的に人類が到達した英知である。）

生活保護などの社会的な支援を受けているケースについて、貧困は自分の責任であるから、自分の力で何とかすべきだという世論が醸成されたことがあります。もしその声が強まれば、支援を受けている家庭に育つ子どもたちは、いたたまれない思いを抱くでしょう。けれど、人はいつ何どき、自分の力だけで生きていられない状況に陥るとも限りません。病気になる、生計の担い手が失業する、障害をもつ、年をとるなど、様々なケースが考えられます。そういう「いざとなった時」社会にセーフティーネットがあれば、安心して暮らしていくことができます。つまり、セーフティーネットは、今それを利用している人だけのためにあるわけではありません。それは、すべての人が「いざとなっても」困らないためにあるのです。しかも、そのような制度をつくることこそ社会の公正なあり方だ、と人類は長い時間をかけて考えるようになりました。それは人類のたどり着いた英知です。そのことを、子どもたちに教える必要があるのではないのでしょうか。弱者を攻撃することで、セーフティーネットを貧弱なものにしていくのではなく、すべての人が住みやすい社会を目指すことは当然だという考えを子どものころからもつためにも、それを学校教育の中で、子どもたちが学び、しっかり認識する必要があります。

・社会をかえる主体を育てる

(今自分が居る場を、すこしでも居心地のよいところに変えることは可能であると知る。

人類は自由で平等に生きる権利を自分たちの手で獲得してきたことを学ぶ。

それを、クラスの中や学校、生徒会で実践する。)

人類が、自由や幸福になる権利を獲得した歴史を学び、しかも、これからさらに社会をよい方向に変えることができると学ぶことも、学校教育の重要な役割のひとつです。

それを、生徒会活動などを通して体験できるのも学校ならではのことで。

・人生は生きるに足るものであること、と、生きていることは苦しいけれど楽しいと、教える

(ロバート・D・ヘイル「書店人は、人びとを日々の抑圧から解放し、楽しみ・希望・知識を人びとに贈る」教師もそうあらねばならないのではないか?)

過酷な条件の下で、生活する子どもたちであればあるほど、学校という場ではその苦しさを忘れ、楽しい学校生活を送れるようにすることも、教職員の責務です。また、おとなが生きることを楽しんでいる姿をみせることができれば、子どもたちは、将来に明るい希望をもてるはずで。

[8] 今、学校を再び居場所に ～ 何から始めるべきか～

・学校が本来持っている役割を再認識する

「学校と家庭以外に居場所を！」ではなく、「家庭と学校と地域に居場所を！」

今、教職員が本来取り組むべきことに手がまわらない現実をしっかりと捉えなおし、その改善を始めるべきです。

まず、最初に取り組むべきこと

・時間と心のゆとりをとりもどす

その方法、工夫を、学校が決める権限をもつ。つまり

・現場から出発する

(学校が本来の役割を果たすために優先順位を正しくつける。)

例：授業時数の数を増やせばいいのか？→カリキュラムは学校が決める。

学校内で学習支援を(そこで外の人びとと協力する)

子どもたちと直接関わりのない仕事を精選する。

学習のつまずきはどこからくるのか？→小学校の低学年での支援を手厚くする。

教師自らが、人間らしい生活を取りもどす

・学校と外の機関とがつながり、協力して、子どもたちを支える

今、学校外で行われている学習支援などの活動と学校の教育活動が、どのようにつながりをもって、関わるおとなが協力できるかということが、問われています。

学校の垣根が高いと言われることもありますが、一つの案を提示したいと思います。

まず、各自治体にコーディネーターを置き、学校には窓口担当を置きます。学校で、外部の協力が必要な時には、その窓口担当がコーディネーターに連絡をとります。コーディネーターは、公と民間の支援政策や支援団体を把握していて、そこに依頼します。

たとえば、夏休みに学校で補習する時、教職員以外の手が欲しい、あるいは、不登校の生徒が、ようやく保健室登校できるようになった時、保健室で話し相手になる人を紹介してほしい、など様々なケースで、その要望と支援を結ぶ方法です。

これは、実際にどこかの自治体を実施し、そのモデルケースを全国に紹介することで、広げていけると思います。

[9]おわりに

育つ家庭が抱えている環境のために、子どもたちの未来が閉ざされることがないように、今、全国の心ある人々が、そういう子どもたちに手を差し伸べています。そして、それはとても喜ばしいことです。

けれど、今学校が、子どもたちを日々の抑圧から解放し、友人と協同で何かを創り出す喜びを体験し、さらに自分の将来に希望をもって、その実現に前向きに取り組める“場”でなくなっているとしたら、それをまず改善すべきではないでしょうか。

学校という“場”がもつ可能性をもう一度見直し、その力を復活させなければなりません。

そしてそれは、子どもたちが本来もっている力を発揮させることでもあります。

子どもたちは、仲間の窮状を自分のこととして悲しみ、手を貸そうとする優しさをもっています。人類がたどりついた“全ての人に幸せに生きる権利がある”という英知をしっかりと受けとめ、それを継承することが必要だと認識できる賢さがあります。

多様な子どもたちが共に生きる学校で、様々な課題を仲間と解決する体験は、やがて、この社会をつくりあげる主体となる能力を培います。

もう一度、学校の可能性に目を向けることから始める必要があると、私が思うのはそのためです。

